



作家・大田洋子
(1903~1963)

広島県北広島町に生まれる。明治45年9歳の時に母の再婚により佐伯郡玖島村(現廿日市市玖島)に移り住む。昭和4年26歳のときに小説家としてデビュー。昭和15年には後に映画化される長編小説「櫻の國(さくらのくに)」で一躍人気作家となる。

作家として— 大田洋子の見た原爆

人類史上最初の原爆をテーマにした小説「屍(しかばね)の街」。作家、大田洋子がこの小説を書き上げた場所が玖島にある。人間の眼と作家の眼とで見た8月6日からの記録。原爆と向き合うことで、何を感ぜ何を訴えたかったのか。玖島で執筆活動中の証言とともにたどっていく。

原爆投下の3年後、昭和23年に中央公論社から出版された「屍の街」。作家として戦前から活動していた大田洋子さんが自身の被爆体験を基に書きつづった。

大田さんは、昭和20年1月に東京から広島市白島九軒町の妹宅に疎開。8月6日、そこで被

爆し、広がる惨状を目の当たりにした。3日後、由縁のあった旧佐伯郡玖島村の松本商店に避難する。

「私の家は商店を営んでいて、祖父が大田さんの親類と知人だったのでこちらに来られたのでしょう」と当時を知る小田洵子さんは話す。

大田さんは同じように玖島に避難し放射能の被害に苦しむ人の姿を見て死を覚悟したという。商店の2階を借りた仮住まいの生活。物資の乏しい中提供され

た障子紙などを使い、原爆投下の年内に書き上げた「屍の街」。原稿は何度か出版社に送られたが、進駐軍のプレスコードにか

かり、原爆の悲惨さを描写した作品は出版ができなかった。しかし、原爆投下3年後の昭和23年、内容は一部削除されたが、ついに日の目を見ることとなる。

「学校から帰り、2階に行くと大田さんは机に向かい、原稿を書いていました。周りにはたくさんさんの書き損じの紙が丸められ、転がっていたのを覚えていました」と小田さん。

次代に繋ぐ

時の流れとともに風化していく当時の記憶。

過去を知り、次代へと語り継ぐことが

今を生きる者にできること。70年前の夏は、私たちに何を語りかけるのだろうか。

記録とつづりどめる

戦後70年が経過し当時の様子を知る人も少なくなってきた。はつかいち平和の祭典実行委員会では、原爆投下時の廿日市の姿を記録としてとどめるため、市内救護所の様子などの証言を集め、DVDの作成を行う。

DVD作成にインタビューアとして携わるようになった東園恵さん。はつかいち観光親善大使やFMはつかいちのパーソナリティーとしても活躍する。

「学校でも学ぶことはありましたが、自分から知ろうとしない限り、戦争や8月6日の本当の姿は見えてきません。今後、当時を知る人たちから直接話を聞く機会はますます減っていくと思います。記録として残すことは、今しかできないのです」。「テレビやインターネットか

ら伝わる世界の情勢。私たちは内乱や戦争が起きている国々をどこか遠い目で見てしまいがちです。しかし、過去も現在も戦争で虐げられるのは私たちのように普通に生活している人たちです」と東園さん。

祖母と共に暮らしている東園さん。戦争中の話も祖母から聞いてきたと言う。「その場面を知る人の言葉には、生きてきた重みがあります。今回、インタビューをしていくなかで、原爆投下直後に廿日市内で救護所が設けられ、多くの人がそこで看護を受けたことを初めて知りました。

こうした戦争の記憶は普段の生活では入ってはきません。今を生きる私たちにはそれを伝えていく責任があると思います」。

「戦争の語り」DVD



はつかいち平和の祭典実行委員会では、原爆投下直後の廿日市の様子を後世に残していくため、証言を集めたDVD作成を行っています。

作成したDVDは複製し、市内小中学校や各市民センターに配布して活用する予定です。

問合せ はつかいち平和の祭典実行委員会(中央市民センター内) ☎01266

慰霊と平和のための黙とうを

原爆死没者の冥福と世界恒久平和の実現を祈念するため、広島に原爆が投下された8月6日(休)8時15分と、長崎に原爆が投下された8月9日(日)11時2分、また、終戦の日である8月15日(出)正午にも、サイレンを鳴らしす。

問合せ 総務課 ☎9100

その場面を知る人の言葉には、生きてきた重みがあります。



当時の宮内地区救護所の様子を小田義生さん(84歳・写真中央)から聞く東園さん



東園 恵(ひがしその・めぐみ)さん
22歳・上平良

Profile
平成25年から第13代はつかいち観光親善大使を務める。また、FMはつかいちではパーソナリティとして「大好き!甘〜い!廿日市♪」などの番組を担当。イベントなどの司会としても精力的に活動中。

風化させてはいけない 記録と記憶

昭和20年8月15日に終戦を迎え、今年には戦後70年。被爆者の平均年齢は現在80・13歳に達し、被爆体験を語ることでできる被爆者は、現在では数少ない存在となっています。

被爆し無念の死を遂げた人たちが。最愛の人を助けることができなかつた人たちが。救護所で懸命に救護し続けた人たちが。今なお原爆症で苦しむ人たちが。

時の流れと共に記憶は曖昧なものになっていきます。被爆者の体験や願い、当時の様子などを語り継ぎ、継承していくことが、今を生きる私たちにできること。インタビューでは「生きていくうちに自分の見たものを伝えておきたかった」という声を聞きました。

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」と平和記念公園の原爆死没者慰霊碑には刻まれています。

被爆地広島と長崎の記録とともに、当時廿日市で何が起ったのか。そこには、風化させてはいけない記録と記憶があります。

—特集 語り継ぐ 終わり—